

宗教が私たちの社会や文化を支配している

丸山 空大

なぜ、近代資本主義はプロテスタント圏で発展し、また、それに従事する者にはプロテスタント信者が多いのか？
 ヴェーバーの答えは、つぎのようなものだった。すなわち、プロテスタント、なかでもカルヴァン派など禁欲的な諸教派の文化的雰囲気、近代的資本主義を推進していく精神性を人びとのなかに準備したのだ、と。利潤の最大化を追求する資本主義と宗教的禁欲という組み合わせは意外にみえるかもしれないが、ヴェーバーが引用するピューリタンの神学者リチャード・バクスターのことばをみるとよくわかる。「つねに時間を大切にし、毎日自分の時間をなくさぬようにもつと注意すれば、あなた方は自分の金銀をなくさぬようになるでしょう。無駄な気晴らしや衣服、ごちそう、無駄話、無益な交友、それに睡眠などのどれかがあなたがたに誘惑となって時間を奪いそうになったら、よくよく注意しなさい。」「神がわれらとわれらの活動をささえ給

うのは行為のためである。勤労は体力の自然的目的であるとともに、倫理的目的でもある。」つまり、勤勉と儉約が宗教的に奨励されたために、資本主義の発展に不可欠な労働の集約や獲得された資本の再投資が促進されたというわけだ。

本書の議論は、国民文化を特徴づける宗教的・倫理的精神性（エートス）こそが文明形成の成否を決するという理論として理解され、戦後の日本でもこのような観点から熱心に読まれた。明治期以降急速な近代化を遂げた日本は、しかし、総力戦体制のなかで神話的世界観に基づく国粹主義へと移行し、敗戦した。戦争相手国であったアメリカの支配をうける戦後社会のなかで、彼我の違いはどこにあるのか、日本人を強い国民として再建するためにはどうしたらよいのか、といった問いが生じたのである。たとえば、この時代を代表する経済学者の大塚久雄は、このような視

点から、幕末以来の禁欲伝統に依拠した明治期の気骨ある日本を回顧しつつ、「自由をふたたび禁欲にむすびつけるような思想的立場」を模索したのだった。しかし、ヴェーバーの思想は、「大きな物語」を徹底的に疑ってかかる二〇世紀後半の思想状況のなかで批判され、日本においても急速な経済成長の中、学問的に取り上げられることは減っていった。

ヴェーバーはもう時代遅れになったのだろうか？ ことはそう単純ではない。そもそもヴェーバーは、生前からあらゆる批判を受けてきた。非プロテスタント地域でも近代化が起こった例はある、カルヴァン派地域でも近代化が進まなかった例はある、宗教への関わりは同じ地域・時代であっても個人によってことなる、エートスのような多数の国民に共通するような心性の実在は実証できない、云々。しかしこうした批判はどれも致命的なものとはならなかった。それらは、専門家がヴェーバーを避けるための格好の言い訳を提供してきた一方で、かえってヴェーバーの議論の魅力を引き立ててきたようにもみえる。

ヴェーバーの魅力とはなんだろうか。それは、彼が描く「大きな物語」がもつ圧倒的な面白さであり、説得力である。読者はヴェーバーの議論を追いながら、知らず知らずのうち

たとえば私たちは、キャリア官僚が激務をこなすために覚醒剤を常用し、「過労死」なるものが日常的にみられる社会に生きている。死ぬほど頑張る、死んでも働くという狂気を、かつて「努力教」の蔓延と揶揄した者がいたが、こうした精神性は一朝一夕にして成ったものではないだろう。このとき、「それこそ私たちのエートスではないのか？」と、つい問うてしまうなら、すでに私たちはヴェーバーの掌中にある。国民性や国民文化についての複雑なステレオタイプ化や愚にもつかない陰謀論に陥ることなく、そこからさらに何を汲み出し考えていくことができるだろうか？
 ヴェーバーが本書に込めた魔術は、刊行百年を経てなお力を失わず、読む者を強力に捕えて放さない。

まるやま・たかお 総合国際学研究院准教授 宗教学

文献案内

マックス・ヴェーバー『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』大塚久雄訳、岩波文庫、一九八九年

